

社会技術研究開発事業
令和5年度研究開発実施報告書

「SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム
(社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築)」
「AYA世代がん患者の孤立・孤独を先制的に一次予防する
フィジカル空間とサイバー空間を融合させた
ネットワーク介入の開発」

藤森 麻衣子
国立がん研究センター がん対策研究所
サバイバーシップ研究部 室長

目次

1. 研究開発プロジェクト名	2
2. 研究開発実施の具体的内容	2
2-1. 研究開発目標	2
2-2. プロジェクトのリサーチ・クエスチョン	2
2-3. ロジックモデル	3
2-4. 実施内容・結果	4
2-5. 会議等の活動	14
3. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況	14
4. 研究開発実施体制	15
5. 研究開発実施者	16
6. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など	18
6-1. シンポジウム等	18
6-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など	18
6-3. 論文発表	18
6-4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）	18
6-5. 新聞／TV報道・投稿、受賞等	18
6-6. 知財出願（出願件数のみ公開）	19

1. 研究開発プロジェクト名

「AYA世代がん患者の孤立・孤独を先制的に一次予防するフィジカル空間とサイバー空間を融合させたネットワーク介入の開発」

2. 研究開発実施の具体的内容

2-1. 研究開発目標

本研究の目標は、

(1) 多層的な社会に属することに起因するAYA世代がん患者の多様かつ多彩な社会的孤立・孤独メカニズムの解明とメカニズムに基づく社会的孤立・孤独を生まない新たな社会像の描出、

(2) AYA世代がん患者の社会的孤立・孤独の多軸的評価指標の開発とリスクの可視化の確立、

(3) AYA世代がん患者の社会的孤立・孤独を一次予防するための仕組みとして、日常生活の中の現実社会(フィジカル空間)と仮想空間(サイバー空間)両面、および病院を介したサポートモデル構築である。

これら目標が達成されることにより、成果としてAYA世代がん患者の社会的孤立・孤独メカニズムに基づく多軸評価指標、予防策が開発され、孤立・孤独とリスクのモニタリングに基づく予防対策評価が可能となる。

2-2. プロジェクトのリサーチ・クエスチョン

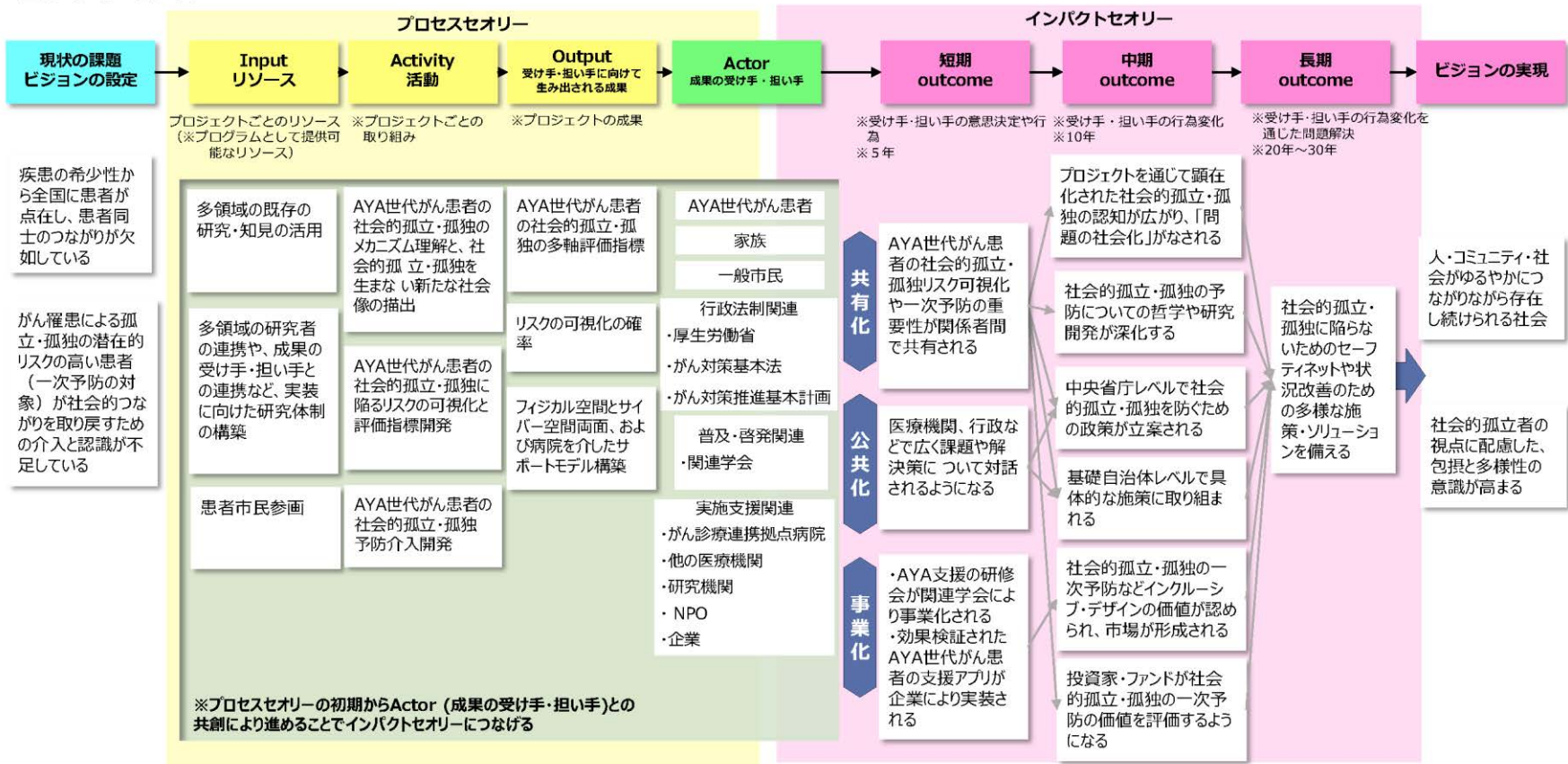
Q1. AYA世代がん患者と他世代のがん患者の社会的孤立・孤独と危険因子・防御因子の違いは何か？

Q2. AYA世代がん患者の社会的孤立・孤独の一次予防に必要な介入要素および多軸評価指標の要素は何か？

Q3. 本研究で開発する支援介入はAYA世代がん患者の社会的孤立・孤独に有効か？

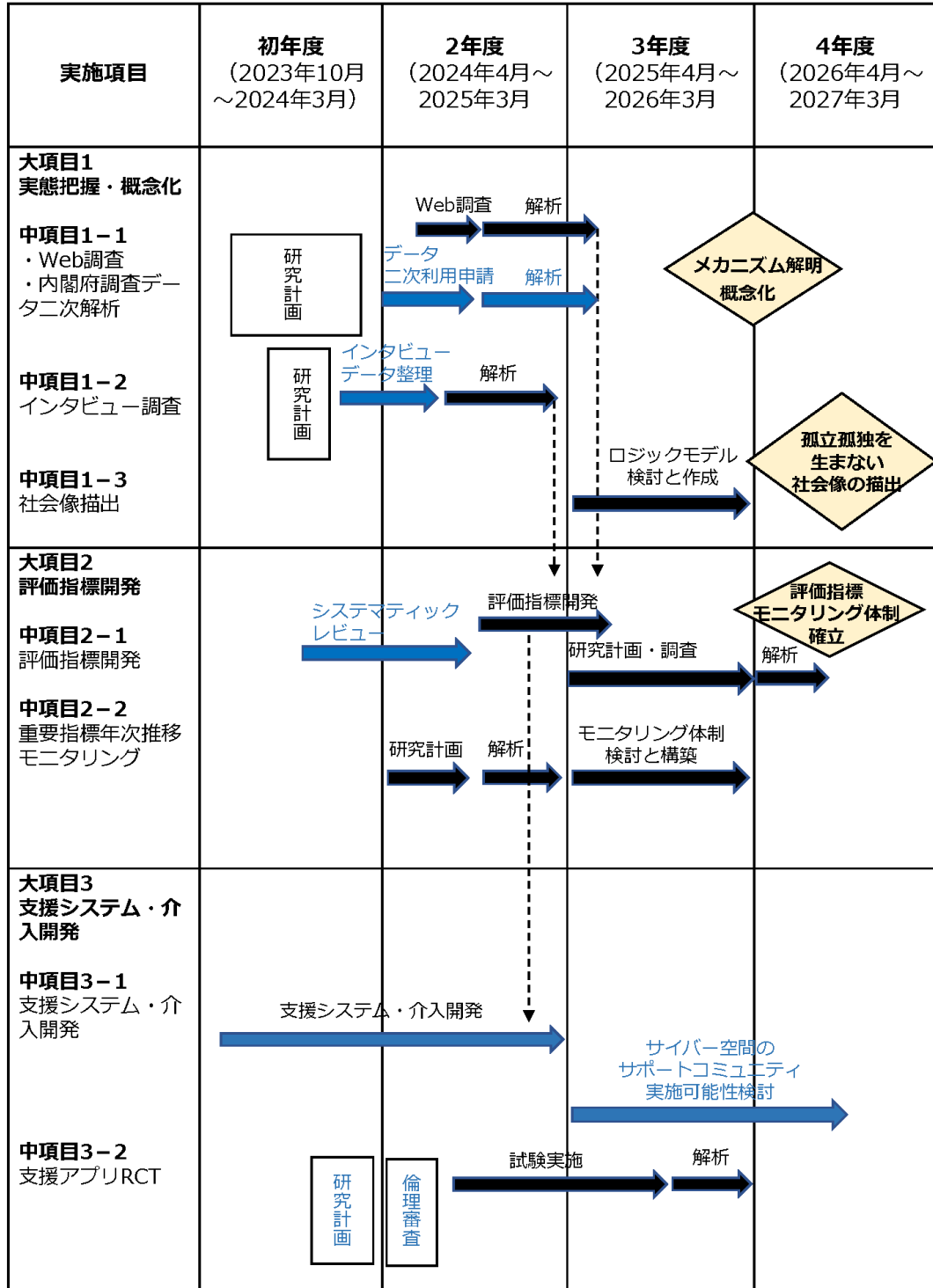
2-3. ロジックモデル

SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム（社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築）
「AYA世代がん患者の孤立・孤独を先制的に一次予防するフィジカル空間とサイバー空間を融合させたネットワーク介入の開発」
ロジックモデル



2-4. 実施内容・結果

(1) スケジュール



*青字：当初の計画からの修正箇所

(2) 各実施内容

■研究統括

当該年度の到達点

プロジェクト全体で定期会議を行い、研究プロジェクトを推進する。

実施内容：

研究統括グループでは、研究代表者を中心にすべてのグループの研究に携わり、全研究のスケジュール・進捗の確認と管理、それぞれのグループ研究援助を行う。また研究グループの実施者、協力者を含めた研究会合を年2回以上実施し、進捗報告、問題点の検討、意見交換を行う。

期間：令和5年10月～令和6年3月31日

実施者：藤森麻衣子（国立がん研究センター・室長）

岡村優子（国立がん研究センター・研究員）

研究開発要素①

■大項目1：AYA世代がん患者における社会的孤立・孤独の実態調査によるメカニズム

解明と概念化

当該年度の到達点1

AYA世代がん患者における社会的孤立・孤独の実態調査を実施する。

中項目1-1：AYA世代における社会的孤立・孤独の実態調査：web調査等

実施内容：

① web調査

調査項目と調査プラットフォームについて研究グループで検討し決定し、研究計画書を作成した。

②内閣府の孤独・孤立の実態把握に関する全国調査「人々のつながりに関する基礎調査」二次解析

非がんのAYA世代の社会的孤立・孤独の実態を把握し、他世代との相違を明らかにするため、内閣府の孤独・孤立の実態把握に関する全国調査「人々のつながりに関する基礎調査」の二次解析を計画した。データ二次利用申請書類と研究計画書を作成した。

期間：令和5年10月～令和6年3月31日

実施者：内富庸介（国立がん研究センター・部長）

岡村優子（国立がん研究センター・研究員）

小濱京子（国立がん研究センター・特任研究員）

崎山貴代（国立がん研究センター・特任研究補助員）

対象：①web調査会社に登録のある16歳以上のがん経験者

②内閣府の孤独・孤立の実態把握に関する全国調査回答者

中項目1-2：AYA世代がん患者における社会的孤立・孤独の実態調査：インタビュー調査

実施内容：

① がんノートインタビューデータ解析

がんノートで実施されたインタビュー（origin 0-155, mini 1-55）のデータ

を整理し、逐語録を作成した。

② 個別インタビュー調査

研究統括グループと会議を行い、課題を検討し、研究計画書を作成中である。

期間：令和5年10月～令和6年3月31日

実施者：内富庸介（国立がん研究センター・部長）

岸田徹（NPO法人がんノート・代表理事）

岡村優子（国立がん研究センター・研究員）

栗栖健（東京大学・大学院生）

対象：18-39歳のがん経験者およびその家族

研究開発要素②

■大項目2：AYA世代がん患者の社会的孤立・孤独の評価指標の開発と重要評価項目の経時的モニタリング体制の構築

当該年度の到達点2

がん患者の社会的孤立・孤独の関連要因に関する系統的レビューを実施する。

中項目2-1：AYA世代がん患者の社会的孤立・孤独の評価指標（尺度）開発

実施内容：

がん患者の社会的孤立・孤独の関連要因に関する系統的レビューの研究計画書を作成し、PROSPEROに登録した。文献検索、一次スクリーニング及び二次スクリーニングを終了した。

期間：令和5年10月～令和8年3月31日

実施者：吉内一浩（東京大学・教授）

岡村優子（国立がん研究センター・研究員）

小濱京子（国立がん研究センター・特任研究員）

小澤桂子（国立がん研究センター・特任研究補助員）

綾田美紗姫（国立がん研究センター・特任研究補助員）

対象：15歳以上のがん経験者

中項目2-2：AYA世代がん患者の自殺の経時的モニタリング体制構築

実施内容：

全国がん登録センターにおけるシステム障害のため、R5年度中に全国がん登録データを入手できなかった。R6年度に全国がん登録データを用いて、AYA世代がん患者の自殺数と標準化死亡比（SMR）を算出し、他の世代との比較検討を行う。

期間：令和5年10月～令和6年3月31日

実施者：吉内一浩（東京大学・教授）

原島沙季（東京大学・助教）

栗栖 健（東京大学・大学院生）

対象：15-39歳のがん経験者

研究開発要素③

■大項目3: スマホアプリによる支援システムとフィジカル空間とサイバー空間を融合させたネットワーク介入開発

当該年度の到達点3

スマホアプリによる支援システムとサイバー空間のサポートコミュニティ開発に必要なチームを組織する。

中項目3-1: スマホアプリによる支援システムとサイバー空間のサポートコミュニティ開発

実施内容:

① スマホアプリによる支援開発

精神心理症状の治療ニーズが高いわが国のAYA世代がん患者に対して、スマートフォンを用いた問題解決療法と苦痛スクリーニングに基づく情報提供を、来院に依存しないサイバー空間において提供することで、社会的孤独・孤独を軽減することが可能か否かを検証する多施設ランダム化比較試験の実施を目的としている。研究統括グループと定期会議を行い、課題を検討し、研究計画書を作成した。

② サイバー空間のサポートコミュニティ開発

社会的孤独・孤独の軽減を目指し、メタバースを用いた、がん患者同士の交流会の設定と実施を目的としている。研究統括グループと定期会議を行い、課題を検討し、研究計画書を作成した。

期間: 令和5年10月～令和6年3月31日

実施者: 明智龍男 (名古屋市立大学・教授)

音羽健司 (名古屋市立大学・教授)

伊藤嘉規 (名古屋市立大学・心理士)

原田喜比古 (名古屋市立大学・医師)

長谷井嬢 (岡山大学・准教授)

対象: ①15-39歳のがん経験者

②10-39歳のがん経験者

(3) 成果

■研究統括

当該年度の到達点

プロジェクト全体で定期会議を行い、研究プロジェクトを推進する。

成果:

R5年10月16日にグループリーダー(3名)、研究実施者・研究協力者(19名)、プロジェクトアドバイザー(4名)でキックオフミーティングを実施した。以後グループリーダー(3名)と研究実施者・研究協力者と月1回定期会議(計5回)を開催し、全研究のスケジュール・進捗の確認と問題点の検討、意見交換を行った。各グループとの打合わせは定期的もしくは適宜実施し(計26回)、研究計画を検討し推進した。

R6年3月24日には、厚労科研研究班と協力し、がん患者の自殺対策に関する公開シンポジ

ウム（オンライン開催）を実施した。本シンポジウムには581名の申し込みがあり、当日参加者数は287名であった。

研究開発要素①

■大項目1：AYA世代がん患者における社会的孤立・孤独の実態調査によるメカニズム 解明と概念化

当該年度の到達点1

AYA世代がん患者における社会的孤立・孤独の実態調査を実施する。

中項目1-1：AYA世代における社会的孤立・孤独の実態調査:web調査等
成果：

①web調査

AYA世代がん患者の社会的孤立・孤独に関する文献と抑うつに関する文献の予備的レビューから、調査項目を検討し調査票を作成した。調査プラットフォームについて、研究グループで検討し、決定した。調査会社と調査対象、調査数、調査スクリーニング等について検討し、研究計画書を作成した。R6年度にweb調査を実施し、解析予定である。

[【web調査項目表】

	調査項目
1	孤独感：UCLA孤独感尺度3項目、直接質問
2	抑うつ：PHQ-9
3	倦怠感：Cancer fatigue scale
4	ソーシャルサポート：日本語版ソーシャルサポート尺度（短縮版）
5	QOL：EQ-5D-5L
6	成しとげる力：Grit Scale-J
7	レジリエンス：Brief Resilience Scale-J
8	人生に対する満足：SWLS（the Satisfaction With Life Scale）
9	経済毒性：COST（Comprehensive Score for Financial Toxicity）
10	がん関連のスティグマ：Perceived Stigma
11	年齢
12	性別
13	居住地域（地方および県）
14	就業状態（現在の職業）
15	世帯の年間収入
16	パートナー・配偶者の有無
17	子どもの有無
18	要介護家族の有無

19	居住人数
20	教育（最終学歴）
21	併存疾患
22	家族や友人たちとのコミュニケーション手段や頻度
23	社会活動への参加
24	がんと診断された部位
25	がんと診断された年齢
26	がんと診断されてからの期間
27	がんと診断されたときの進行度
28	再発・転移の有無
29	現在受けているがん治療の有無と種類
30	過去に受けたことのあるがん治療の種類
31	ECOG Performance Status
32	診断後の生活の変化

②内閣府の孤独・孤立の実態把握に関する全国調査「人々のつながりに関する基礎調査」
二次解析

非がんのAYA世代の社会的孤立・孤独の実態を把握し、他世代との相違を明らかにするため、内閣府の孤独・孤立の実態把握に関する全国調査「人々のつながりに関する基礎調査」の二次解析を計画した。データ二次利用申請書類と研究計画書を作成した。R6年度にデータ二次利用申請し解析予定である。

**中項目1-2：AYA世代がん患者における社会的孤立・孤独の実態調査：インタビュー調査
成果：**

① がんノートインタビューデータ解析

がんノートのインタビューアーカイブの解析についてがんノート代表理事と検討し、データの提供を受けた。提供された音声データから逐語録を作成し、originインタビュー（0-155）とminiインタビュー（1-55）のデータを解析可能なファイルに整理した。

テキストマイニングの手法での解析について、実施者と検討し、研究計画書を作成中である。

② 個別インタビュー調査

研究統括グループと会議を行い、課題を検討し、研究計画書を作成中である。

③ AYA世代がん患者との公開イベント

「AYAがんの医療と支援のあり方研究会」が主催するAYA week（AYA世代のがんについて想う1週間）期間中であるR6年3月7日に、がんノートと共にAYA世代がん患者の社会的孤立・孤独と支援に関する公開イベント（YouTube live配信、60分間）を企画し実施した。公開イベントの登壇者は、AYA世代がん患者（1名）、がんノート代表理事（岸田徹氏）、研究代表（藤森麻衣子）であり、社会的孤立・孤独を含む患者の経験、研究の現状

と課題等について話し合った。イベント参加者へのアンケートを実施し、20名から回答を得た。がん経験者14名、医療従事者3名、患者家族5名、患者友人4名、年齢：30代3名、40代9名、50代6名、60代以上2名であった。自由記述欄には、次のような意見が寄せられた。「がんと告知して、離れていく友人もいた。」、「AYA世代のがんは孤独。2万人に1人といっても、所詮まわりは他人事。だからこそ、AYA世代という言葉の認知が広まってほしいと切に願うし行動している。」、「がんノートに出会えて、私は救われました。」、「がんの既往を隠して仕事をしていました。体力がついていかず適応障害となり、仕事は休職になりました。転職活動しながら体調を整えていますが、将来が不安です。」、「自分がネガティブになると孤独に感じてしまう。誰か聞き出してほしい。助けてほしい。」

孤立・孤独とその支援 @ がんノート *night*
3月7日(木) 20時～
YouTube「がんノート」チャンネルにてLIVE配信予定

孤立・孤独と支援について、経験者と研究者で60分間ゆるくトークします

がんノート 岸田 徹 × ゲスト 経験者 × 研究者 藤森 麻衣子

協力: JST-RISTEX AYA世代がん患者の孤立・孤独を先制的に一次予防するフィジカル空間とサイバー空間を融合させたネットワーク介入の開発!

研究開発要素②

■大項目2：AYA世代がん患者の社会的孤立・孤独の評価指標の開発と重要評価項目の経時的モニタリング体制の構築

当該年度の到達点2

がん患者の社会的孤立・孤独の関連要因に関する系統的レビューを実施する。

中項目2ー1：AYA世代がん患者の社会的孤立・孤独の評価指標（尺度）開発

成果：

がん患者の社会的孤立・孤独の関連要因に関する系統的レビュー
先行研究 (Deckx et al., 2014) で使用されていた検索語により予備的検討を行い、検索語を設定し (英文検索語：“social isolation”、“loneliness”および “neoplasms”、和文検索語：“孤独”、“孤立”および “がん患者”)、検索エンジンをPubMed、Cochrane Library、医中誌とした。研究計画書を作成し、PROSPEROに登録した。文献検索結果、PubMed 597件、Cochrane Library 43件、医中誌 53件、計693件であった。文献の一次スクリーニング、二次スクリーニングを終了した。

研究開発要素③

■大項目3: スマホアプリによる支援システムとフィジカル空間とサイバー空間を融合させたネットワーク介入開発

当該年度の到達点3

スマホアプリによる支援システムとサイバー空間のサポートコミュニティ開発に必要なチームを組織する。

中項目3-1: スマホアプリによる支援システムとサイバー空間のサポートコミュニティ開発

成果:

① スマホアプリによる支援開発

AYA世代がん患者に対するスマートフォンを用いた問題解決療法と苦痛スクリーニングに基づく情報提供のシステムを開発し、またこれらを遠隔で実施することが可能な分散型臨床試験の仕組みを構築した。あわせて全国8施設から多施設臨床試験グループを構築し、研究計画を名古屋市立大学病院の倫理審査委員会に提出した。

② サイバー空間のサポートコミュニティ開発

主として入院患者を対象として交流会を開始しており、R5年度中にメタバースでの交流会を10回開催した。現在は全国14医療施設が賛同しているものの、施設側のデバイスやシステムへの習熟が必要な段階にあり、実際に参加できた施設・患者数は限定的であることが課題として抽出された。そこで各施設へのデバイスやシステムの扱いに関する説明会と試行でのメタバース参加体験会を実施し、マニュアルを作成している。研究統括グループとは定期会議を行い、課題を検討し、研究計画書を作成した。

(4) プロジェクトのリサーチ・クエスチョンについて明らかになったこと

Q1. AYA世代がん患者と他世代のがん患者の社会的孤立・孤独と危険因子・防御因子の違いは何か?

AYA世代がん患者と他世代のがん患者の社会的孤立・孤独と危険因子の違いを明らかにするために、がん患者を対象としたweb調査とがん患者の社会的孤立・孤独と危険因子に関するシステマティックレビューを計画した。web調査項目及びシステマティックレビューをR6年度に実施する。

Q2. AYA世代がん患者の社会的孤立・孤独の一次予防に必要な介入要素および多軸評価指標の要素は何か?

がん患者を対象としたweb調査、システマティックレビューに加え、非がんを含むAYA世代の社会的孤立・孤独の特徴を明らかにするため、内閣府の孤独・孤立の実態把握に関する全国調査「人々のつながりに関する基礎調査」を利用し二次解析を計画した。また、AYA世代がん患者への100を越えるインタビューを解析し、量的データと質的データより一次予防に必要な介入要素および多軸評価指標の要素を抽出する。

Q3. 本研究で開発する支援介入はAYA世代がん患者の社会的孤立・孤独に有効であるか？

精神心理症状の治療ニーズが高いわが国のAYA世代がん患者に対して、スマートフォンを用いた問題解決療法と苦痛スクリーニングに基づく情報提供を、来院に依存しないサイバー空間において提供することで、孤独感、孤立感を軽減することが可能か否かを検証する多施設ランダム化比較試験を実施する。

(5) 当該年度の成果の総括・次年度に向けた課題

●プロジェクトの達成目標に対する現在の進捗状況と要因、課題と解決方法

研究開発要素①

進捗状況：若干遅れている。

Web調査：調査項目の選定に予想以上に時間を要したことにより、当該年度での調査実施が困難となった。来年度は調査を実施し、解析予定である。

内閣府の孤独・孤立の実態把握に関する全国調査「人々のつながりに関する基礎調査」二次解析：二次利用申請先が内閣官房より内閣府に移管されたことにより当該年度中に申請できなかった。来年度に申請し、解析予定である。

インタビュー調査：がんノートのインタビューアーカイブデータ解析の準備は順調に進捗している。個別インタビュー調査については、検討を開始したところであり、引き続き研究統括グループと対象、方法等検討を重ね研究計画書を作成する。

研究開発要素②

進捗状況：若干遅れている。

がん患者の社会的孤立・孤独に関する系統的レビュー：順調に進捗している。

AYA世代がん患者の自殺の経時的モニタリング体制構築：全国がん登録センターにおけるシステム障害によって、当該年度はデータを入手、解析を実施できなかったが、来年度以降データ入手次第開始予定である。

研究開発要素③

進捗状況：順調に進捗している。

スマホアプリによる支援開発：研究計画に関して名古屋市立大学病院の倫理審査委員会において承認を得た後に、全国の8施設で多施設ランダム化比較試験を開始する。2024年3月に倫理審査委員会で開催された外部評価委員を含めた質疑に出席し、質疑応答の結果、改訂点に関するポイントが明確になったため、現在はそれに対応中である。2024年の4～5月に倫理審査委員会の実施承認を得られる予定であるため、2024年度には多施設ランダム化比較試験を開始し、症例集積を行いたい。AYA世代は臨床研究を拒否する割合が高いことが世界的に知られているため、各施設と強力な共同研究の仕組みを構築して、予定の研究期間内に目標の244例を達成したい。加えて、次年度は、研究計画を臨床研究レジストリ（UMIN-CTRなど）に登録するとともに、研究計画を英文論文として投稿する予定である。

サイバー空間のサポートコミュニティ開発：当該年度に、主に入院患者を対象としてメタバースでの交流会を開始した。現在は全国14医療施設が賛同しているものの、施設側のデバイスやシステムへの習熟が必要な段階にあることから、マニュアルに基づき各施設へのデバイスやシステムの扱いに関する説明会と試行でのメタバース参加体験会を継続する。また、参加患者に対するアンケート調査票と研究計画書を作成し、岡山大学の倫理審査委員会において承認を得た。2024年度に各参加施設の倫理審査委員会での審査を予定している。

●各実施項目で得られた結果や成果を俯瞰・統合した結果分かったこと

NPO法人がんノートと共に実施したAYA世代がん患者の社会的孤立・孤独と支援に関す

る公開イベントでは、AYA世代がん患者の社会的孤立・孤独を含む患者の経験に基づき議論した。患者の経験、またアンケート結果からも、AYA世代がん患者の多くが社会的孤立・孤独を感じている可能性が示唆された。

2-5. 会議等の活動

年月日	名称	場所	概要
2023年10月16日	キックオフミーティング サイトビジット	オンライン (Zoom)	本研究開発プロジェクトの概要説明と達成目標の確認 意見交換
毎月第3月曜日 (計5回)	プロジェクト全体定例ミーティング	オンライン (Zoom)	研究プロジェクトの進捗報告と意見交換
毎週木曜日 (計21回)	統括グループ定例ミーティング	オンライン (Teams)	研究計画進捗報告と実施予定確認、ディスカッション
2023年11月17日	メタバースピアサポート開発ミーティング	オンライン (Zoom)	開発計画に関するディスカッション
2023年11月20日	インタビュー調査打ち合せ	オンライン (Zoom)	「がんノート」のインタビューデータ解析に関する意見交換
2023年11月28日-29日	プログラム全体会議	AP市ヶ谷	各PJ進捗報告と全体議論
2023年12月4日	メタバースピアサポート開発ミーティング	オンライン (Zoom)	開発計画に関するディスカッション
2024年1月15日	メタバースピアサポート開発ミーティング	オンライン (Zoom)	実施計画に関するディスカッション
2024年2月5日	プロジェクト戦略会議	オンライン (Zoom)	研究プロジェクトの進捗報告と意見交換
2024年3月1日	イベント打ち合せ	オンライン (Zoom)	AYA weekイベントに関する打ち合せ

3. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況

本プロジェクトは、本年度（令和5年度）開始となった。来年度以降実態調査等の結果が得られる予定である。

4. 研究開発実施体制

(1) マネジメント体制

研究統括グループは研究代表者を中心にすべてのグループの研究に携わり、全研究のスケジュール・進捗の確認と管理、それぞれのグループ研究援助を行う。また研究グループの実施者、協力者を含めた研究会合を年2回以上実施し、進捗報告、問題点の検討、意見交換を行う。

(2) グループごとの概要

実態把握・メカニズム解明・概念化グループ

グループリーダー：内富庸介（国立がん研究センターがん対策研究所サバイバーシップ研究部 部長）

国立がん研究センターがん対策研究所サバイバーシップ研究部

NPO法人 がんノート

金沢医科大学医学部

実施項目：

中項目1-1 AYA世代における社会的孤立・孤独の実態調査（web調査）

中項目1-2 AYA世代がん患者における社会的孤立・孤独の実態調査（インタビュー調査）

中項目1-3 AYA世代がん患者の社会的孤立・孤立を生まない社会像の描出
グループの役割の説明：

AYA世代がん患者の社会的孤立・孤独の実態把握とメカニズム解明・概念化を目的に、AYA世代がん患者、家族、医療者のweb-インタビューによる実態調査を実施し、AYA世代がん患者モデルを構築する。また、実態調査の結果に基づき、患者、家族、医療者に加え、政策立案者、研究者、市民を含むステークホルダーにより社会的孤立・孤独を生まない社会像をロジックモデルとして描出する。

評価指標開発グループ

グループリーダー：吉内一浩（東京大学大学院医学系研究科 教授）

東京大学大学院医学系研究科

国立がん研究センターがん対策研究所サバイバーシップ研究部

実施項目：

中項目2-1 AYA世代がん患者の社会的孤立・孤独の評価指標（尺度）開発

中項目2-2 AYA世代がん患者の自殺の経時的モニタリング体制構築

グループの役割の説明：

AYA世代がん患者における社会的孤立・孤独のリスクの可視化を目的に、実態調査の結果から、AYA世代がん患者の社会的孤立・孤独の評価指標を開発する。ま

た、全国がん登録データを用いた重要評価指標（AYA世代がん患者の自殺）の年次モニタリング体制を構築する。

スマホによる支援システム開発グループ

グループリーダー：明智達男（名古屋市立大学大学院医学系研究科 教授）

名古屋市立大学大学院医学系研究科

岡山大学学術研究院医歯薬学域医療情報化診療支援技術開発講座

NPO法人 がんノート

国立がん研究センター中央病院骨軟部腫瘍科

実施項目：

中項目3-1 スマホアプリによる支援システムとサイバー空間のサポートコミュニティ開発

中項目3-2 スマホアプリによる支援システムと介入の検証試験

グループの役割の説明：

AYA世代がん患者の多様な質の社会的孤立・孤独の一次予防を目的に、スマホアプリによる支援システムの開発、サイバー空間のサポートコミュニティの開発を行う。分散型臨床試験基盤を用いたスマホアプリによる支援システムと介入のパイロットランダム化比較試験を実施する。

5. 研究開発実施者

実態把握・メカニズム解明・概念化グループ（リーダー氏名：内富 庸介）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
内富 庸介	ウチトミ ヨウスケ	国立がん研究センター	サバイバーシップ研究部	部長
岡村 優子	オカムラ マサコ	国立がん研究センター	サバイバーシップ研究部	研究員
小濱 京子	オバマ キョウコ	国立がん研究センター	サバイバーシップ研究部	特任研究員
崎山 貴代	サキヤマ タカヨ	国立がん研究センター	サバイバーシップ研究部	特任研究補助員
岸田 徹	キンダ トオル	NPO法人がんノート		代表理事

評価指標開発グループ (リーダー氏名: 吉内 一浩)

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
吉内 一浩	ヨシウチ カズヒロ	東京大学大学院医学系研究科	心療内科	教授
原島 沙季	ハラシマ サキ	東京大学大学院医学系研究科	心療内科	助教
栗栖 健	クリス ケン	東京大学大学院医学系研究科	心療内科	大学院生
岡村 優子	オカムラ マサコ	国立がん研究センター	サバイバーシップ研究部	研究員
小濱 京子	オバマ キョウコ	国立がん研究センター	サバイバーシップ研究部	特任研究員
小澤 桂子	オザワ ケイコ	国立がん研究センター	サバイバーシップ研究部	特任研究補助員
綾田 美紗姫	アヤタ ミサキ	国立がん研究センター	サバイバーシップ研究部	特任研究補助員

スマホによる支援システム開発グループ (リーダー氏名: 明智 龍男)

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
明智 龍男	アケチ タツオ	名古屋市立大学大学院医学研究科	精神・認知・行動医学分野	教授
音羽 健司	オトワ タケン	名古屋市立大学医学部附属東部医療センター	精神科	部長・教授
伊藤 嘉規	イトウ ヨシノリ	名古屋市立大学病院	臨床心理室	公認心理師・臨床心理士
原田 喜比古	ハラダ ヨシヒコ	名古屋市立大学大学院医学研究科	精神・認知・行動医学分野	臨床研究医
長谷井 嬢	ハセイ ジョウ	岡山大学学術研究院医歯薬学域	医療情報化診療支援技術開発講座	准教授

6. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

6-1. シンポジウム等

年月日	名称	主催者	場所	参加人数	概要
2024年3月24日	公開シンポジウム「がん患者の自殺対策」	国立がん研究センターがん対策研究所サブイパーシティブ研究部(藤森 麻衣子)	オンライン開催	287名	がん患者の自殺対策に関する研究結果報告、及び、院内自殺対策に関し医療者によるパネルディスカッションを行った。

6-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

(1) 書籍、フリーペーパー、DVD

該当なし

(2) ウェブメディアの開設・運営

- ・【孤立・孤独とその支援】がんノートnight #125

<https://www.youtube.com/watch?v=1FqNJIOb-B4>

3月7日20時ライブ配信

(3) 学会（6-4.参照）以外のシンポジウム等への招聘講演実施等

該当なし

6-3. 論文発表

(1) 査読付き（ 0 件）

●国内誌（ 0 件）

●国際誌（ 0 件）

(2) 査読なし（ 0 件）

6-4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）

(1) 招待講演（国内会議 0 件、国際会議 0 件）

(2) 口頭発表（国内会議 0 件、国際会議 0 件）

(3) ポスター発表（国内会議 0 件、国際会議 0 件）

6-5. 新聞／TV報道・投稿、受賞等

(1) 新聞報道・投稿（ 1 件）

・RSK山陽放送、2023年12月6日、「一人で悩まないで」岡山大学が孤独に悩む患者用のメタバース（仮想空間）開発 外見気にせずアバターで交流

(2) 受賞（ 0 件）

(3) その他 (0 件)

6-6. 知財出願 (出願件数のみ公開)

(1) 国内出願 (0 件)

(2) 海外出願 (0 件)